

調査・研究ノート

林家が主体となった組織化の意義を考える

今後の林業・森林管理の担い手に関する考察

一、はじめに

昨年の夏、今後の森林・林業政策のあり方として「木材生産を主体としたものから将来にわたり森林の多様な機能を持続的に発揮させていくための森林の管理・経営を重視したものに転換」すべきとの提案が、「森林・林業・木材産業基本政策検討会」から出された。この「検討会」は、森林資源の内容、木材の需給構造、森林に対するニーズ等が大きく変化する中で、今後の森林・林業政策のあり方を示すべく林野庁長官の諮問機関として開かれたものである。

現段階では、この提案がどのような形で今後の政策として実行されていくのかについて明らかではないが、林業振興を基本としてきた戦後の林政は「環境財」としての森林の管理・経営にその軸を移すだろう。しかし一方で、林業という旧来からの森林へのアプローチが新しい林政の中から完全に抜け落ちるとは考えにくい。それは、「検討会」が提起したような「森林の多様な機能を持続的に発揮させていくための森林の管理」の具体的な手法が確立されていないこと、財政難や世論により大量の公的資金を森林に投入することが容易でな

いこと、などから推測できる。こうしたことから、新しい林政では「林業が成立するところは林業による森林の管理・経営を行い、それ以外のところは環境面を重視した公的な森林の管理・経営を行う」といったアプローチが想定されているといわれている。ここで問題となるのは、実際の程度「林業による森林の管理・経営」が行えるかである。その面積が決して広くないことは、現在の日本林業の状況から判断できよう。さらに、大きな問題はたとえ現在は、林業による森林の管理・経営」が成立している林業地であっても、高齢化・過疎化の進行、木材価格の低迷、森林の管理放棄の増大等の問題は深刻であり、十年先には林業地から撤退せざるを得ないような地域が多いことである。

新しい林政において、林業は森林を管理・経営する手段の一つとして位置づけられると思われるが、こうした深刻な林業事情を考えるとその維持はたいへん難しい状況となっているといえる。そこで、様々な工夫と苦勞を重ね、現在の林業不況下でもなんとか林業地として踏みとどまっている地域をどのようにして維持していくのか、つまり如何にして担い手を育成・維持していくのかについて、再度

検討する必要があると考える。

本小文では、長年議論されてきた担い手問題を再考するための布石として、林家が主体となって設立された林業作業のための組織を事例的に紹介し、これらの意義と課題についての考察を行った。

二、林家が主体となった組織化の事例

(一) ウッドクラフト中川根(静岡県中川根町)  
 ウッドクラフト中川根は、作業委託による生産形態が木材価格の低迷により成り立たなくなってきたことや雇用労働力の確保が困難になってきたことから、「植栽から伐出、加工、販売までの技能を身につけた自律した林業経営者となること」を目標に一九九八年に設立された。メンバーは、地元の林業研究会の中で熱心な七人で、平均年齢は四五才、茶業やシイタケ生産、林業を主業としている農林家で、各々の山林経営面積は最小で三二ha、最大では一五八haという中大規模層に属する林家である。組織の事業は、「機械の共同利用」を中心に、地域の林道網を改善しようとする計画を自分達で作成したり、作業の共同化を進めている。特に「機械の共同利用」は、低コスト林業を小人数で行う上での要として位置づけられている。以前から、機械化を進めたいとの意向は強かったものの、一台数百万円以上する林業機械を個人で購入することは負担が大き過ぎることなどから、なかなか進んでいなかった。そうしたことから組織

で機械を保有し、それらをメンバーにリースしていく「機械の共同利用」が進められた。将来的には、利用間伐等を中心にメンバー同士の共同施業をさらに進める他、林業技術を持った林家の組織として地域の森林の管理を進めたいとしている。

(二)有限会社天竜フォレスト(静岡県天竜市)

天竜フォレストは、全国に先駆けて作業班を組織した竜山村森林組合の作業班で林業技術を身につけたイターン者四人と地元の林家の後継者一人が出資して、九〇年に設立された。現在では、イターン者一人と地元林家一人が加わり計八人に増加している。事業内容は、天竜市及び竜山村周辺の林家から育林や伐出作業を口コミ等を頼りに請負っている。顧客となる林家は固定されてきており、委託される林地の状況を常に把握している「山の守り手」としての機能を果たしつつある。また、最近では不在村地主の山林を経営的側面を含めた管理も始めている。この他、九八年には地元の林業関係者により、作業機械の共同利用を目指して設立された組織「天竜森林(もり)の会」に、法人として参加し、地域林業の機械化にも一役かっている。

(三)梶原林産業企業組合「ゆうりん」(高知県梶原町)

ゆうりんは、地元の自営生産林家から伐出業者に発展したY氏をリーダーに、高齢化する自営生産林家に代わる間伐作業請負

林家が中核となっている林業作業組織の事例

組織名	ウッドクラブ 中川根	天竜フォレスト	天竜森林 (もり)の会	ゆうりん
地域	静岡県 中川根町	静岡県天竜市	静岡県天竜市・ 竜山村	高知県梶原町
設立年	1996年	1990年	1998年	1995年
構成員	地元林家	地元林家、 イターン者	地元の林業関 係者	地元林家、 イターン者
人数	7人 (平均年齢45才)	8人(平均年齢 30才後半程度)	5人と1法人 (平均年齢44才)	10人 (平均年齢43才)
事業内容	機械の共同利用 共同作業	林業作業の請負	機械の共同利用	木材の伐出の請負 架線架設作業 作業道建設

組織として、九五年に設立された。組合員は三〇才〜五二才までの農林家を中心とした一〇人で、イターン者一人以外は地元出身者である。九六年の事業開始以来、毎年千〜二千m程度の間伐を行っており、自営生産林家の高齢化・リタイアの増加とともに間伐作業の委託件数は増加している。しかし、木材価格の低迷により間伐作業の請負作業だけでは組織としての経営が困難になりつつある。そのため、作業路建設や

治山事業の架線張りなどの林業関連の土木作業等も請負いながら、地域の新しい林業作業組織として経営の安定化を図っている。三、今後の課題

以上紹介したような林家が主体となった林業作業のための組織が、現在、全国でどの程度設立されているのかについて把握はできていない。けれども、概してこれらの組織は、経済的な基盤が弱く小規模であるため、地域全体の林業・森林管理の担い手として期待することが難しいと推測される。

しかし、これまで戦後の林政の中で基幹的な組織として育成が図られてきた森林組合や第三セクターがその機能を十分に果たせない状況にあり、「全面的崩壊」への危機が迫っているほど厳しい国内林業の現状では、新たに基幹となる担い手像を描き出すことは非常に難しい。

そこで、地域のニーズにより生まれたこれらの組織を、林家が主体となった「小さな担い手」として評価し、さらにその長所である柔軟性を活かして、個(林家)と公・官(森林組合や行政)との間を取り持つ「補完的な組織」として位置づけることはできないだろうか。

担い手問題の根本的な解決策が見出せない現在、少しでも多くの意欲ある林家が森林の守り手として持続できる方法を柔軟に検討していくことが重要であると考える。

(栗栖祐子)